

令和3年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター	
施 設 名	宮古市民文化会館	
助成対象活動名	普及啓発事業	
内定額(総額)	7,112	(千円)
公演事業	0	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	7,112	(千円)

(3) 令和3年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	ARTS for U18 ※	6月2日、9日、17-18日、7月31日、10月1日	<ul style="list-style-type: none"> ●オペラシアターこんにやく座「タング」 ●泉真由×松田弦「フルーツとクラシックギターのひびき」 ●CAT-A-TAC「ライトな兄弟」 ●松永貴志「ジャズ・コンサート」 ●穴迫信一「演劇ワークショップ」 ※新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う客席制限(50%)を受けての上演	目標値	入場者数：4300人・参加者数：200人
		宮古市民文化会館 大ホール、展示室		実績値	入場者数：3018人
2	コミュニティシアター事業 ※	7月28日～30日、2月6日	【コンサートキャラバン 2021】 演奏：いわてフィルハーモニーオーケストラ 【みやこ市民劇プレ公演】 出演：みやこ市民劇ファクトリー パネリスト：坂田裕一、道又力 ※新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う行動制限を受け事業内容を変更	目標値	入場者：1700人・参加者150名
		和井内ふるさと会館ほか3箇所、宮古市民文化会館		実績値	入場者：240名
3	芸能 Re:Connect ※	5月2日、3月14日	【三陸太鼓フェスティバル】 出演：鼓風、利府太鼓、山木家太鼓、大館曲げわっぱ太鼓、宮古あばれ太鼓、山口太鼓の会 ※新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う客席制限(50%)を受けての上演 【みやこ郷土芸能祭】 出演：黒森神楽、末角神楽、花輪鹿子踊り、澤目獅子踊り	目標値	入場者800人・参加者100人
		宮古市民文化会館 大ホール		実績値	入場者数：498人
4	MIYAKO A. I. R. (アーティスト・イン・レジデンス)	12月10-19日、2月22-27日、3月22-27日	【DX：第九を踊る】 振付：森下真樹 演奏：日本フィルハーモニー交響楽団 出演：森下真樹 ほか 【nature：三陸 BUDORI/1万年に1cmだけ小さかった山】 テキスト：穴迫信一 振付：北尾亘 出演：伊東沙保	目標値	入場者数：350人・参加者数：20人
		宮古市民文化会館 大ホール		実績値	入場者数：110人
5	三陸ダンス借景&三陸ジオミュージック ※	-	※中止：新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う行動制限を受け中止	目標値	入場者数：100人
		-		実績値	-
6	介護と演劇事業『介護に寄り添う演技』 ※	-	※中止：新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う行動制限を受け中止	目標値	参加者：30名
		-		実績値	-

7	ジュニアカンパニー事業 ※	2021年4月～ 2022年3月	【こども劇団みやこデイジー】 演出・脚本・指導：小笠原景子 出演：こども劇団みやこデイジー 【ジュニア・アンサンブル・みやこ】 講師：寺崎巖、いわてフィルハーモニー オーケストラ ほか ※変更：新型コロナウイルス感染症拡大 防止により発表公演を関係者のみに変更	目標値	入場者 300 名・参加者 35人
		宮古市民文化会館		実績値	入場者 93 人・参加者 27人

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>宮古市民文化会館は、岩手県中部沿岸（宮古・下閉伊地域）の芸術文化振興の中核文化施設として、宮古市民文化会館施設条例に加え、宮古市総合計画、並びに震災の文化復興に関する提言書等を踏まえた8つの社会的ミッションを設定し運営している。</p> <p>令和3年度は上記ミッションのうち、4つの項目をリンクさせた事業を計画した。</p> <p>新型コロナウイルス感染症拡大防止として一部プログラムを中止・規模縮小をしたが、下記事業を計画し実施した。</p> <p>(1) 各地の表現者を地域に滞在させながら、創作活動を行い、地域との交流を通して地域文化を豊かにする役割を行うレジデンス事業</p> <p>(2) 地域内の多様な文化が交流し、新たな表現づくりを生み出す土壌を作り出す役割としての作品創作事業</p> <p>▶（普及啓発事業4）MIYAKO A. I. R.（アーティスト・イン・レジデンス）</p> <p>(3) 文化芸術による次世代育成を推進する事業として、本市の小学校・中学校・高等学校に通う児童生徒が劇場での鑑賞を体験する事業</p> <p>▶（普及啓発事業1）ARTS for U18</p> <p>(4) 新たなコミュニティの形成や失われたコミュニティの復活を果たすための芸術文化活動を牽引する役割として市民団体の活動のサポート事業</p> <p>▶（普及啓発事業2）コミュニティーシアター事業、（普及啓発事業3）芸能 Re;Connect、 （普及啓発事業7）ジュニアカンパニー事業</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>●文化的意義</p> <p>本市及び近隣市町村は、都市部と比べ、芸術文化への距離が物理的にも心理的にも遠い地域である。アーティスト・イン・レジデンスなどの芸術家を地域に滞在させる事業や、被災地域及び僻地へ向けたコンサートキャラバン事業、市民劇等を通じた地域の集いの場づくりは、芸術文化と市民の距離を埋める取組みとなっている。</p> <p>●社会的意義</p> <p>コロナ禍において地域の「まつり」が制限され、郷土・伝承芸能活動も滞っている状況にある。その中で十分な感染症対策や専門的なスタッフワークを持って事業及び発表の場を担保することができたのは、地域文化の伝承並びに文化交流という点において、大きな役割を担っている。</p> <p>●経済的意義</p> <p>各事業アンケートから来場者の約2割が市外から訪れている。これは盛岡=宮古間の横断道路や、八戸=仙台間の三陸自動車道の全線開通も影響しているが、訴求力のある事業を通じて観光等への波及効果も予想される。</p> <p>以上のことから、助成に値する意義が継続して認められると考えられる。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

今年度事業では東日本大震災からの文化的復興を軸とした3つの目的に沿い、以下の通り目標を立てた。

1. 舞台作りなどに参加する市民の数を5%増加させる。(指標：市民参加数の実績)
2. 会館以外での本館企画の芸術鑑賞人数を5%増加させる。(指標：鑑賞者数の実績)
3. 会館とパートナーシップを組む施設や団体を増加させる。(指標：地域団体数の実績)
4. 郷土芸能の鑑賞者数を5%増加させる。(指標：鑑賞者数の実績)
5. 本館を訪れる市内の児童生徒の割合を100%を維持する。(指標：鑑賞者数の実績)

目標の達成については以下の通りである。

- ① 今年度は市民参加企画である「みやこ市民劇」の開催を予定していたが、初夏から秋にかけて実施された、都市部の緊急事態宣言の行動制限や、岩手県独自の緊急事態宣言において会館の休館が発令されたことから十分な準備期間を設けることができず、開催を令和4年度へ延期することが決まった。しかし、前段階としてみやこ市民劇の周知や題材へ理解を深めるためのプレイベントを、市民の発案で開催することができた。5%増加の目標は達成できなかったが、完全な中止にせず本公演につなげる事業を実施できた。
- ② 夏に行われたコンサートキャラバンでは、初日に台風が直撃し、一部会場でのコンサートを中止した。またコロナ禍における入場者制限が敷かれ、目標値の57%しか達成できなかった。
- ③ 当初、市内高等学校吹奏楽部と市社会福祉センターとの協同事業を予定していたが、どちらも新型コロナウイルス感染症による施設利用制限及び岩手県独自の緊急事態宣言を受け中止。目標を達成することができなかった。
- ④ コロナ禍での観客減少から回復せず、達成できなかった。
- ⑤ 小学校・中学校公演ではコロナ禍のため入場者制限を実施。鑑賞しない学年を設けたため、目標値の70%しか達成できなかったが、昨年度より回復した。

新型コロナウイルス感染症の影響が顕著に出た一年であり、多くの事業で当初の目標を達成することはできなかった。しかし鑑賞事業において、令和2年度は大幅な中止があったにもかかわらず、今年度は主催公演のほとんどを実施することができ、with コロナにおける事業運営の基盤が作られた一年であった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

普及啓発事業は3事業を当初の計画通りに実施、2事業を計画変更で実施、2事業を中止とした。

事業期間はどの事業も当初の予定通り実施することができたが、コミュニティーシアター事業「みやこ市民劇」においては、新型コロナウイルス感染症拡大防止による本館施設の利用制限期間があったため、十分な準備・稽古期間を設けることができず、令和4年度へ延期することとした。しかし、脚本ができていたことや、隔年開催の市民劇をより周知したいという有志によりプレ公演として一部脚本の朗読劇や、ゆかりのある市民によるトークセッション等を本来開催予定としていた時期に実施した。

新型コロナウイルス感染症拡大防止策の影響で中止した2事業については、流行の停滞が不透明であったことや、都市部からの往来による市民の懸念が払拭できない時期であったため、関係者間協議の末中止せざるをえなかった。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

中止事業以外の事業に対しては、支出については当初の計画からほぼ予定通りに進んだが、収入については予定を大幅に下回った。

新型コロナウイルス感染症拡大防止による入場者制限があったことや、事業計画の変更により、収入を見込んでいた公演を無料公演としたことなどが要因となっている。東日本大震災からの文化芸術の復興としてようやく有料公演での来場者数が回復してきたところで新型コロナウイルス感染症の影響はとて大きい。With コロナ期を迎えた今、観客が無料公演に偏らないよう工夫した事業の実施が必要とされる。

支出面では舞台費が予定より増加した事業もあった。これは芸術家の要望に対しできるだけ応える姿勢で取り組んだ結果であるが、舞台制作費と相応の事業内容の本館の現状を踏まえた事業計画を改めて考える必要があると痛感している。

また、今年度は地域のリサーチを含んだ事業が多く旅費の支出も嵩んだが、一度の滞在に複数事業の実施（アウトリーチ）や次年度に向けた打ち合わせなどを実施することができ、合理性がとれたと考える。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

■文化拠点としての資源

みやこ市民劇を主導する「みやこ市民劇ファクトリー」、こども劇団みやこデイズ、ジュニアアンサンブル・みやこは本館を拠点に活動し、各団体の発表、公演の際には令和3年度においても本館と協働で行っており、市民の創作・活動の場として活用されている。

当初予定ではみやこ市民劇第三回公演を予定していたが、前述のようにコロナ禍による準備期間不足があり、中止となった。しかし演劇文化を絶やさず本公演へと繋げるイベントを開催することとなり、プレ公演の実施へと切り替えた。この提案はみやこ市民劇ファクトリーから上がったものであり、公演に際するあらゆる計画を本館と共に行った。継続的な芸術文化活動をする上で、企画段階から市民と関わりを持って作り上げることができたことは今年度の大きな一歩であった。また、実施アンケートでは本公演への参加希望者が20%を超え、事業への関心が高まった結果であると言える。

また今年度行ったアーティスト・イン・レジデンス企画では、施設の活用を幅を広げる公演がなされた。平土間のホールを会場に行われた演劇作品「1万年前に1cmだけ小さかった山」では、通常客席を設ける平土間面を舞台空間とする試みを行った。公演後のアンケートでは見たことのない空間であったと好評を得た。舞台上に拘わらず、施設設備を最大限発揮することができた公演であり、市民に向けた活用方法の一例を提案できた事業であった。

■文化拠点としての事業

前述した通り、アーティスト・イン・レジデンス企画「MIYAKO A. I. R.」では会館施設を最大限活用した公演を行った。

第一弾としてクラシック音楽とコンテンポラリーダンス、ライブビューイングとライブパフォーマンスを融合したデジタルトランスフォーメーションをテーマとし森下真樹振付・構成の「ベートーヴェン交響曲第9番を踊る」を公演。スクリーンに映るオーケストラの映像に合わせ、群舞が繰り広げられる作りで、2014年の再オープン以降初めてとなるダンス公演であった。舞台機構を存分に使った本館ならではの公演ができたことや、近隣の劇場の中でも目新しい公演であったことから満足度が97%を超え、大変好評であったと言える。

第二弾として劇作家と振付家による三陸地域の自然をテーマにした演劇作品「1万年前に1cmだけ小さかった山」を公演。2月、3月に1週間ずつ本市に滞在し3月末に公演。本市の風土や歴史、文化を2020年度からリサーチし、本公演を発表公演とし短編演劇作品を創作。2019年度から交流をもつアーティストに依頼することで、継続的に本館を訪れる機会を創出することができた。都市部から移動に5時間を要する本市では同一のアーティストが継続的に訪れることが難しく、本企画を通してアーティスト同士、またアーティストと地域の文化交流の機会を創出することができたと考える。

以上のことから地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する事業ができたと考える。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

以下の事業から、地域の文化進行及び文化芸術の発展につながったと考えられる。

① 市内の小学生～高校生に向けて劇場で芸術に触れる機会（事業番号1）

2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止策として、小学校・中学校の全校、高等学校の一部学校で芸術鑑賞事業の実施ができなかったが、今年度は70%の児童・生徒に向け実施することができた。もとより舞台芸術の鑑賞の機会が少ない本市において、鑑賞機会の喪失は致命的であったため、学校鑑賞事業が実施できたことはwithコロナにおける舞台芸術の前段階となったと言える。次年度も学校機関と協議の上、児童・生徒全員が継続して鑑賞できるよう調整している。

② 若年層への継続的な芸術体験の機会（事業番号7）

上記①に則し、体験する機会も重要と考えている。本館では2014年の再オープン以降、市内小中高校生を対象とした音楽と演劇のふたつのジュニアカンパニーを本館の附属団体とし活動している。本館を訪れるアーティストとの交流のほか、年一回の発表公演を行っている。本年は学校からの新型コロナウイルス感染症拡大防止策として参加自粛要請がなされ思う様な活動ができなかったほか、参加人数も少なくなってしまうが、演劇ではオリジナル作品の上演、音楽もいわてフィルハーモニーオーケストラのアンサンブルと共演するなど、学校以外での大人と交流する機会を設けることができ、新たな交流や多様な価値観を育む場になったと考える。

③ 豊かな郷土芸能と新たな芸能の発信（事業番号3）

本館周辺地域において、地域の「まつり」が中止となることが多く、それに関わる郷土芸能団体の活動も滞っている状況にある。本館では今年度新たな芸能の発信ということで、東北・三陸の太鼓演奏グループ等を招聘し競演会を行う三陸太鼓フェスティバルを開催した。コロナ禍において各地の団体を集めることに感染対策を十分に交えて行った本公演は、本館としても久しぶりの集客公演であった。観客の多くはやはり市内と市内近隣市町村であったが、アンケートでは久しぶりのイベントに喜ぶ声が聞かれた。

また冬に行われた郷土芸能祭においても、盛岡からの郷土芸能団体を招聘し公演することができ、芸能団体同士の交流のほか、普段見ることのない市外団体の演舞に感動する声もあった。

コロナ禍で活動自粛・中止が続く中で公演できたことは大きな地域文化振興の一因になったと考える。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

事業を通じて本組織がより劇場・音楽堂としての機能が強化され、組織活動が継続的に発展したと考える。
以下 PDCA サイクルの視点から考察する。

●PLAN

まず本館のミッション8つのうち主に事業運営にかかる事項として4つ挙げられる。（要望書様式1-5より）
この4つの事業を基点に各事業が展開されている。

- ①市民協働運営の原則 ②芸術鑑賞機会の増進と市民参加型
- ③子どもの芸術体験とアウトリーチ活動の推進 ④心の復興事業とコミュニティづくりの推進

●Do

市民参加型企画は運営にも関わってもらう体制を整え、文化芸術に関わる人材育成も行っている。市民に教える機会を設けることで会館職員のレベルアップも図るほか、舞台技術職員はテクニカルプランナーとして携わり、舞台の専門家の育成に努めながら事業を実施した。

●Check

全ての事業においてアンケートを実施し、公演の満足度のほか、舞台芸術や本館の取組への関心度、施設内の過ごしやすさ等を計測している。事業の実施後、月1回の企画経営会議にて事業のアウトプットについて報告を行い内部での検証を行っているほか、年2回の運営協議会にて事業を報告し評価を行っている。

●Action

企画経営会議ほか運営協議会にて受けた評価は早ければ次回公演に、遅くとも次年度には改善するよう努めている。

2020年度はコロナ禍により主催事業のほとんどが中止となったため、コロナ禍における公演実施の可能性について考えた。国や県、市が定めた感染対策に基づき本館でも入場制限等の制限を設けたほか、来館するアーティストにむけコロナ対策のチェック表を作成し個人の健康状態も管理していただいた。おかげで今年度開催した事業でアーティストのコロナ感染やクラスターの発生を防ぎ、公演等実施することができた。

また、本組織は岩手県沿岸地域の文化芸術コーディネーターであることから、本館を拠点に沿岸地域における文化芸術事業の相談窓口を担っている。事業で得た経験を地域に還元することが可能となり、持続的な視点からも活動が発展したものとする。